
バレンタインの悲劇

なんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バレンタインの悲劇

【Nコード】

N7239A

【作者名】

なんじ

【あらすじ】

原作33巻で、めでたく蘭からのチョコを貰った新一コナンであったが、思いもかけぬ悲劇が彼を待ち受けていた……。 (作者注…悲劇と喜劇は紙一重)

開幕の辞

こんにちは、江戸川コナンです。

今日は、僕の体験した、もつとも悲惨な
バレンタインの出来事をお話しましょう。

今回の事件のキーワードは、「チョコレート」

そう、あれは、蘭から吹渡山荘で作った

チョコレートを受け取ったあの雪の日。

幸せに幕を閉じるはずだったあの日の夜の事・・・。

第一幕

コナンは蘭への電話を終えた後、事務所に入った。

蘭の顔は、電話の前とはうって変わって晴れ晴れとしていた。

「あら、コナン君ごめんね。ご飯遅くなって。

おなかすいたでしょう？」

その蘭の幸せそうな顔を見て、コナンも幸せだった。

「大丈夫だよ」

二人の会話で、小五郎が目を覚ました。

「お、もうこんな時間かあ。

蘭、飯はまだか？」

「まだなの。ごめんなさい。すぐつくるから」

「今からかあ、どっかに食いに行くかあ？」

「ダメ。今月は遊びに行ったりして家計が苦しいの。

冷凍食品の安売りをまとめ買いしてるから、すぐご飯、できるわ。

そうね、ピラフとグラタンとデミグラスソースで煮たハンバーグと

スパゲティもあったわね」

「なんか、節約言ってる割には、大盤振る舞いだな」

「だってバレンタインじゃない。

お父さんはチョコより、お酒の方がいいんでしょう？」

手抜きで悪いけど、ご馳走にしてあげる。

コナン君もたくさん食べてね」

「い、良いよ。蘭ねえちゃん。

僕、待ってる間にお腹すいて、お菓子食べちゃったんだ。

だから、あんまり、お腹すいてないんだ。

僕は、お茶漬けくらいで良いよ」

それは事実だった。

頭脳は大人でも、体は子供。

その小さな胃袋に、蘭の手作りチョコレートの量は、

いささか、荷が重かった。

「ダメよ、コナン君。」

ご飯をちゃんと食べないと、大きくなれないわよ」

“大きくなれないのは確かに困るが・・・”

にこやかな蘭に、額をつつかれながらコナンは思った。

「蘭が張り切ってるんだ。コナン、絶対残すなよ」

“自業自得”と言う言葉が、コナンの脳裏に浮かんた。

“ああ、何か事件でも起こって、晩御飯がうやむやになってくれな
いかなあ”

コナンの思いに答えるように、チャイムが鳴った。

「まあった、こんな時間に非常識な。依頼なら断れよ、蘭」

「でも、おじさん、すごく困っている人かもしれないよ」

蘭より先にコナンはドアに駆け寄った。

“こんな時間にわざわざくるんだ。事件だ、事件。きっと難事件だ”
期待で胸が高鳴る。

しかし、ドアの外の現実には、過酷だった。

第二幕

開かれたドアの前に立っていたのは、寸胴鍋を持った 妃 英理だった。

「何しに来たああ！」

小五郎の声を無視して英理は事務所に入り、娘に話し掛けた。

「ねえ、蘭。晩御飯にビーフシチューどう？」

ちよっと、作りすぎちゃって」

「喰った！もう晩飯はすんだ！な、コナン」

小五郎の否定を強調するために、コナンも必死でうなずいた。が、蘭に二人の切なる思いはまったく通じなかった。

「わあ！よかった。晩御飯まだなのよ。」

お母さんったら、本当はお父さんのためにビーフシチュー作ったんでしょう。

だって、今日はバレンタイン。一緒に食べようと思ったのよね」

英理は、頬を赤らめ娘の視線から、目をそらした。

「違うわ、今日は寒いでしょ。」

だから、なんだか無性にシチューが食べたくなくて。

でも、ほら、シチューって物は、少し作っても美味しくないし、だから・・・」

話すにつれ、英理の頬の赤みは顔全体に広がっていった。

“このお婆さんも素直じゃねえなあ”

そう思いつつ、コナンはすり足で、ドアのほうににじり寄った。その行動に、いつもに似合わぬ鋭さで、小五郎が気づいた。

「おい、コナンどこに行く」

「あ？いやあ、せっかくの家族水入らずのバレンタイン。

お邪魔しちゃあ、悪いと思って。」

僕、阿笠博士の所へ行くよ」

小五郎はコナンの襟首を持ってつまみあげた。

「水臭い事を。おめえはもう、家族同然だぜ」

笑顔の小五郎だが、口ほどに物を言う目はこう語っていた。

“逃がさねえぜ。”

ノルマを一口でも減らすために、おめえが必要なんだよ“

英理が、あふれんばかりの笑顔で話し掛けた。

「そうよ、コナン君。」

コナン君の分もちゃんとあるわ。

お婆さん、腕によりをかけて作ったの。

たっくさん、食べてね」

“うわっ、最悪”

コナンは、笑顔を作っとうなずきながら、自分の運命を呪った。

第三幕

いつもなら、母親とおしゃべりしながら食べる蘭が、無言でシチューを口に運ぶ。

“さすがの蘭も、今日のこの味には勝てねえみたいだ”
コナンは思った。

味をなるべく無視するため、すばやく食べる必要があった。
3人の食べるスピードの速さを、英理は誤解しているようだった。

「美味しいでしょう？」

にこやかに問い掛ける母親に、蘭が、少しばかり引きつった笑顔で言った。

「ね、お母さん。これ、いつものシチューの味と違うわね」

英理はうれしそうに言った。

「そう、わかる？」

栗山さんの知り合いが、有名な洋食屋さんでね。

そこのビーフシチューは、特に美味しいって評判なの。

だからそこで使っている、特選素材を、

特別に分けてもらったのよ」

“栗山さん、どうせなら、完成品を分けてもらうように、誘導してくれ！”

自慢げに頬を染めて話す英理を見ながらコナンは思った。

「それにね、デミグラスソースを作る時、

シャトウ・ラトゥールを1本入れてみたの。

ほら、覚えてる？ 白鳥警部の別荘で、警部が自慢していたあのワイン。

あれと同じ物を、依頼主から、頂いたのよ」

「おい！なんで、こんなもんなかに入れたんだ！

ビンごと持って来い！」

小五郎の叫びに英理は冷たく答えた。

「『こんなもん』とは何よ。

それにビンごと持ってきたら、誰かさんが、がぶ飲みした挙句、醜態を晒すだけでしょう？」

そして英理は、娘とコナンに、笑顔で話し掛けた。

「こうして、お料理に使えば、未成年の、蘭や、コナン君も一緒に味わえるしね」

「あ、暖かいご配慮痛みいります」

コナンは、必死で笑顔を作った。

「あら、やだ、コナン君ったら、緊張しちゃって」

華やかな英理の笑い声にまぎれて、蘭が、コナンに小声で話し掛けた。

「ね、コナン君。あのワインいくらするって白鳥警部言ってたっけ？」

「蘭姉ちゃん・・・値段の事は、忘れようよ」

コナンは必死でシチューを口に運んだ。

「一体、なぜこんな味なんだろう？」

特選素材や、高級ワイン達が、その本望をまっとうできなかった、恨みの味なのだろうか？

コナンは非科学的な事を考えていた。

「・・・お母さん。それにしても、少し・・・その・・・不思議な味ね」

蘭が慎重に言葉を選んで話し掛けた。

「蘭のやつも、この味はあまりにおかしいと思ってやがる」

蘭の言葉に英理はいたずらっぽく笑って言った。

「それはね、今日は特別な隠し味を入れてあるからよ」

コナンは、考えた。

“隠し味？一体何入れたんだ、おばさん！

そもそも隠し味って物は、料理本体の味を引き立てるために入れるもんじゃねえか。

でも、この隠し味、シチューの味を半殺しにしてるぜ“

「おい、毒じゃねえだろうなあ」

小五郎の言葉に英理は、迫力のある笑顔で答えた。

「あら、毒を入れたんなら、あなただけに食べてもらうわ」

「大体、何で、シチューしか持ってこねえんだ！

どうせなら、飯も一緒に持って来い！」

「ご飯が欲しいんなら自分で炊いたら？」

蘭が二人の会話に割って入った。

「ね、お母さん、せっかくのシチューでしょ。

本格的っぽく、フランスパンで食べたいわ。

駅前のパン屋さんのフランスパンが美味しいって評判だから、

私、コナン君と一緒に買ってくる」

“少しでも、動いて腹を減らそうって作戦か。

えらいぞ！蘭。俺も連れてってくれるのか“

英理が、立ち上がった。

「もう暗いんだし、危ないわ。それに寒いし。

車で来てるから、私が行ってあげる。

15分くらい待っててね」

二人の希望は、あえなく砕かれた。

第四幕

英理が姿を消すと同時に3人はため息をついた。

シチューをまずそうに食べない様にする努力に疲れ果て、そして、なかなか減らないそれを見ての、絶望のため息であった。

蘭が心底すまなそうに言った。

「ごめんね、コナン君。」

お母さん、今日は特別に、張り切っちゃったみたいで。

博士の所に行ってもらった方が良かったわね」

「大丈夫だよ。蘭姉ちゃん」

必死で、平然としたふりをするコナンに、

蘭は、包み込むような笑顔を向けた。

「ね、コナン君。」

服部君がここにいれば、食べるの手伝ってもらえるのにね」

コナンは自分でもなぜかわからないが、突然不愉快になった。

「蘭姉ちゃん！何で、はっとり・じゃなくて平次兄ちゃんなんだよ。」

新一兄ちゃんがちゃんというじゃないか！」

「なんだか服部君の方が、たくさん食べる事が出来るような気がするのよ。」

それにほら、服部君、剣道部でしょ」

“俺だって、サッカー部だよ。まあ、『元』だけだよ”

「あの、大阪の坊主は役に立たんぞ、蘭」

小五郎が言った。

「奴は、あの静香さんの手料理で育ってるんだぜ。」

そんな舌の肥えた奴が、一口でも、『これ』を喰う事が出来ると思うか？」

「あの、てっちり、美味しかったわね」

蘭が遠い目をした。

「まだ、あの生意気な探偵坊主の方が、英理の料理にゃあ、チビの頃からの免疫があるからな、奴なら、何とか食えるだろうが。」

まったく、えらそうな顔をして、いらん事件にしゃしゃり出るくせに、

こういう必要な時にいないんだからな。役に立たん奴だ」吐き捨てるように言う小五郎をコナンはにらんだ。

“おっさん、いいかげんにしろよ”

蘭が考え込むように言った。

「新一が急いで、帰っちゃったのは事件のせいなんかじゃなくて、この事を知っていたからなのかしら」

「まさか、蘭姉ちゃん。いくら新一ちゃんでも、未来の事なんてわからないよ」

「でも、新一の推理力ってすごいから」

「蘭姉ちゃん、これは、推理と全然関係ないんじゃないやあ・・・」

それに新一ちゃんなら、この事わかってたら、きっと蘭姉ちゃんを助けてくれたと思うよ」

蘭は、コナンを優しい瞳で見つめた。

「そうね、コナン君。新一ならきっと・・・」

“すまねえ、蘭。さっきは逃げようとして。”

でも、俺が新一の体だったら絶対にお前を助けてやれるのに。

こんなチビの体じゃあ、食べられる量も、たかが知れてるぜ！“

コナンは空しさをかみ締めたが、その胃袋は空しいどころの状態ではなかった。

“蘭のチョコを食ってなかったら、まだ少しはましなんだろうが、厳しすぎるぜ、この状況“

小五郎がため息をついた。

「英理の奴、変わらねえなあ。」

いまだに、うまいもんとうまいもんを混ぜると、

もっとうまいもんになるって信じてるんだな」

「そうね、お母さんは、昔っから、素材にはうるさかったわ・・・」
蘭の視線は、その特選素材達のたどった哀れな末路を見つめているようだった。

抗議の声をあげる、胃袋を無視して、コナンはシチューを口に運んだ。

ふと、スプーンの中に、妙な物があるのに気づきその手を止めた。
その正体を見極めようと、コナンは、スプーンを近づけ見つけた。
そして、その物体が何であるか気づいた時、コナンの手から力が抜けた。

小さな音を立てて、スプーンが皿に当たって落ちた。

「おい、コナン。どうした」

「コナン君、気分が悪いんなら、無理しちゃダメよ」

コナンは、二人の声を無視してつぶやいた。

「ダメだ・・・」

「おい、コナン！あきらめるな！

蘭を助けてやってくれ！」

小五郎が叫んだ。

視線を皿のシチューに落したまま、

コナンは言った。

「俺の計算じゃあ、この皿の分は何とかできるはずだった。

でも、こんなもんが、入ってるんじゃない、もうお終いなんだよ・・・

」

「何？コナン君、何が入ってたの？」

消え入りそうな声で、コナンは答えた。

「・・・レーズン・・・」

「レーズン？干しぶドウか！何でそんなもんが入ってるんだ！」

小五郎が驚きの声をあげた。

蘭がため息をついた。

「私の中には、アーモンドと、カシューナッツが入っていたわ」

目を丸くして言葉を失った小五郎に、蘭はあきらめきった笑顔で話し掛けた。

「お母さん、きつとお父さんのために、お酒のおつまみもいれて煮込んだんだと思うわ」

「じゃあ、レーズンは、レーズンバターのレーズンか。

酒のつまみが特別の隠し味の正体なんだな。

しかし、全然隠れてねえじゃねえか、この隠し味」

「煮込めば、わからなくなるとお母さん、思ったのよ。きつと。

それにしても、コナン君、レーズンが嫌いなものね。新一と同じだわ。新一、小学校の給食で、ブドウパンが出ると、レーズンだけ私にくれてたっけ。

コナン君も、ブドウパンが出たら、レーズンだけ除けて食べるの？」
気の聞いた事も言えず、ただうなずくだけしか出来ないコナンであった。

小五郎が、顔をしかめた。

「何だ？こりゃ？さくらんぼうか？？」

これも酒のつまみなのか？？」

「お母さん、お酒のつまみだけでなくって、自分が美味しいと感じた物を

手当たり次第にいれて、煮込んだのかしら？」

蘭の言葉を聞きながら、コナンは考えた。

“レーズン、カシューナッツ、アーモンド、チェリー……。

いや、これは酒のつまみなんかじゃない。

まさか、隠し味って言うのは……。

うわあ、信じられねえ。

確かに、不可能な物を除外していつて

残った物がどんなに信じられなくてもそれが真実だ。

しかし、不可能な物を除外するも何も、鍋に入れる事のできる大きな食べ物なら

なんだって、シチューに入れることは出来るけどさ、でも、常識ってもんがあるだろう、おばさん！

裁判で見せてくれるあの判断力を料理にも、ほんのちょっとでいいから使ってくれよ！“

蘭がぽつりと言った。

「もう・・・、捨てちゃおうか。お母さんが帰ってくる前に・・・全部食べちゃった、って言えばわからないよね・・・」

小五郎が静かに言った。

「そうしたとして、蘭。おめえ、英理の顔をまっすぐ見ることが出来るか？」

蘭は黙って首を横に振り、のろのろとスプーンを口に運んだ。

コナンも、スプーンを口に持っていていこうとした。

“これは、ブドウパンと同じだ。レーズンさえ、除けてしまえば、ただのシチュー。

煮込まれて、レーズンのエキスがシチュー全体に回っているなんて事は・・・

いや、理論的にはそうでも、無視できるほどの濃度のはず“

しかし、いくら心にそう言い聞かせても、どうしても手が動かない。

突然、小五郎が雄たけびの様な声をあげた。

コナンと蘭は、驚いて小五郎を見た。

「ふっ、仕方がねえ。封印していた、俺の奥義を見せる時が来たようだ」

「おじさん、なんなの？それって」

「大学時代、綾城は、足元にも及ばず、大村は、裸足で逃げていき中道さえも、とうとう、俺にかなわなかった、この技・・・それは、大食い！！！！」

大食いの極意は、両肘を脇の下から離さぬ心構えで、ひたすら喰うべし！喰うべし！」

小五郎は、ものすごい勢いで、シチューを食べ始めた。

自分の皿をあつという間に空にし、蘭の皿、コナンの皿も、次々と取り上げ空にした。

「蘭！お代わりだ！」

そして、蘭、コナンが目を丸くして見守る中、小五郎はひたすら食べ続けた。

終幕

「いいわよ。ここまでで、二人とも」

探偵事務所のビルの入り口で、英理は言った。

「まったく、見送りも出来ないほど食べ過ぎるなんて、ほんとにあの人ったらみともない」

英理の言葉に、今回は同意できないコナンであった。

事実、小五郎に感謝する日がするとは、今日まで思ってもいなかった。

“だが、俺の推理が正しければ、

この件はおっちゃんのお業自得という面があるんだけどな”
英理はうれしそうに言葉を続けた。

「でも、良かった。動けなくなるほど、食べるくらい気に入ってもらえて。」

やっぱり、隠し味が良かったのかしら」

「ねえ、お母さん。隠し味っていったい、なんだったの？」

蘭が、どこか、恐る恐る、といった様子で聞いた。

娘のそんな様子に気づかず、英理はうれしそうに答えた。

「チョコレートを入れてみたの」

“ああ、やっぱり・・・”

コナンは心の中でうめいた。

“なんせ今日はバレンタインデー。

でも、おっちゃんは、素直にチョコを受け取らなかったんだろうな。きつと”

「な、なんでチョコなんて、お母さん・・・」

「少し早いと思ったけど、一週間前、あの人に、義理チョコ持ってきたの。」

誰からも、もらえないんじゃないかと思う。

なのに、あの人『こんな、甘ったるいもんが食えるか！』ですって。

だから、どうしても、食べさせてやろうと思って、どうすればいいか考えてたのよ。

そしたら、たまたま、日売テレビの、『阿藤家の食卓』でね、『カレーの隠し味に、チョコレートを入れると美味しい』ってやってたから、

“これだ！” って思ったの。

ビーフシチューもカレーも、材料は似たようなものでしょ。

それで、チョコレートを入れてみたんだけど、おいしかったでしょう？」

質問に正直に答える勇気が無かったコナンは逆に質問した。

「ねえ、おばさん。やっぱりチョコはジゴバ？」

「あら、コナン君。推理だけでなくて、舌の方も鋭いのね。もちろんジゴバも入ってるわ」

“ジゴバも、ってことは、他にも入ってるんだな。”

一体どれだけチョコを入れたんだ、おばさん

隠し味は・・・、隠し味は大量に入れるもんじゃあねえよ”

「最近はこのチョコレート屋さんも、バレンタイン用のチョコを作ってるから、

なんだか選ぶのに迷っちゃって、色々買っちゃたわ。

ジゴバのハートモノグラムに、バレンタイントリュフに、リキュールコレクションに・・・」

英理の指は、どんどん折り曲げられてゆく。

「ジゴバ以外なら、ジンチャロフに、ル ショコラティエ タカノ、メイハウス、

ラ・ノゾン・デュ・ショコラ、シャンllポール・エヴァン・・・」
そしてその指はまた順に伸ばされていった。

「お母さん、それ全部入れたの」

蘭は小声で言った。

「そうよ、いい物を惜しみなく使うのが、美味しい料理を作るコツよ、蘭」

自信たっぷり言い切る母親に、蘭は返す言葉を失っていた。
蘭の少しばかり長い沈黙に、英理の鉄壁の自信が揺らいだようだった。

「ねえ、蘭。チョコは溶けるからと思って、そのまんま入れちゃったんだけど、

もしかして、刻んで入れたほうが良かったのかしら？」

悟りを開ききったような笑顔で蘭は答えた。

「そうね、出来ればその方が良かったかも」

英理は、うれしそうにうなずき二人に別れを告げた。

コナンと蘭は、英理の姿が見えなくなるまで、その場に佇んでいた。
やがて、視線を宙にさまよわせたまま蘭がコナンに話し掛けた。

「ね、コナン君、やっぱりチョコはそのまま食べるのが一番いいわね」

「そうだね。煮込むもんじゃないね、蘭姉ちゃん」

二人はぼんやりと、舞う雪を見つめ続けた。

アンコール

そして翌日。

コナン、蘭、小五郎は、新出医院の診察室にいた。
新出医師は笑顔で話し掛けた。

「皆さん、食べすぎですね。」

消化を助けるお薬を出しておきます。

それにしても、胃の調子が悪くなるまで
食べてしまうとは、毛利さんの奥様は、
本当にお料理上手なんですね」

世の中には、謎のままにしておいた方が
良い謎があるように、誤解のまま
にしておいた方がよい事もある。

コナン達の心はその思いに一つとなった。

そして3人は、新出の言葉を笑顔で肯定したのであった

アンコール（後書き）

これは「バレンタインの真実」が放送された頃（つまり2002年）に書いたものです。

某サイトに置いて頂いております。

新しい作品のファイルをうっかり消してしまったので替わりにこいつをUPいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7239a/>

バレンタインの悲劇

2010年10月9日20時08分発行